

吾妻山の火山活動解説資料（令和2年5月）

仙台管区気象台
地域火山監視・警報センター

5月下旬から火山性地震がやや多い状態で経過していますが、その他の観測データに変化はみられず、活発化を示す傾向は認められません。
大穴火口付近では熱活動が継続しており、噴出現象が突発的に発生する可能性があることに留意してください。また、入山する際には火山ガスに注意してください。
噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・地震や微動の発生状況（図1-②③⑤～⑧、図2-②③）

火山性地震は2019年6月以降少ない状態で経過していましたが、5月24日頃からやや多い状態となっています（6月4日現在、期間外）。震源は大穴火口付近直下の浅いところと推定されます。
火山性微動は観測されませんでした。

・地殻変動の状況（図2-①、図3～5）

浄土平観測点（大穴火口から東南東約1km）に設置している傾斜計及びGNSS連続観測では、現在は概ね静穏な時期の変化傾向を示しています。

・噴気など表面現象の状況（図1-①④、図6～8）

監視カメラによる観測では、大穴火口の噴気の高さは80m以下で経過し、大穴火口付近及びその周辺の噴気の状況に変化は認められませんでした。浄土平3監視カメラの熱映像データの解析では、大穴火口の地熱域の温度に大きな変化はありませんが2020年1月頃より面積が縮小しており、また周辺の一部の地熱域（W-15、大穴火口北西）では、2019年11月頃から地熱域の縮小や温度低下が認められています。

・火山ガスの状況（図9）

大穴火口の北西に設置している火山ガス観測装置による観測では、噴気に含まれる二酸化硫黄（SO₂）と硫化水素（H₂S）の濃度比（SO₂/H₂S）^{*}の変化は、現在は概ね停滞しており、2016年から2017年頃の静穏な時期と同じ傾向を示しています。

※噴気中の各種火山ガスは地下のマグマに由来するものであり、その濃度や成分毎の比率（濃度比）の変化は、火山の活動状態の指標のひとつと考えられています。

・全磁力変化の状況（図10～12）

大穴火口周辺に設置している全磁力連続観測装置による観測では、2018年9月頃から大穴火口北西地下の更なる温度上昇や高温域の拡大を示唆する全磁力値の変化がみられていましたが、現在は2018年以前の静穏な時期と概ね同じ傾向を示しています。

この火山活動解説資料は、仙台管区気象台のホームページ（<https://www.jma-net.go.jp/sendai/>）や、気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（令和2年6月分）は令和2年7月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省東北地方整備局、国土地理院、東北大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

本資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の「数値地図50mメッシュ（標高）」を使用しています（承認番号：平29情使、第798号）。

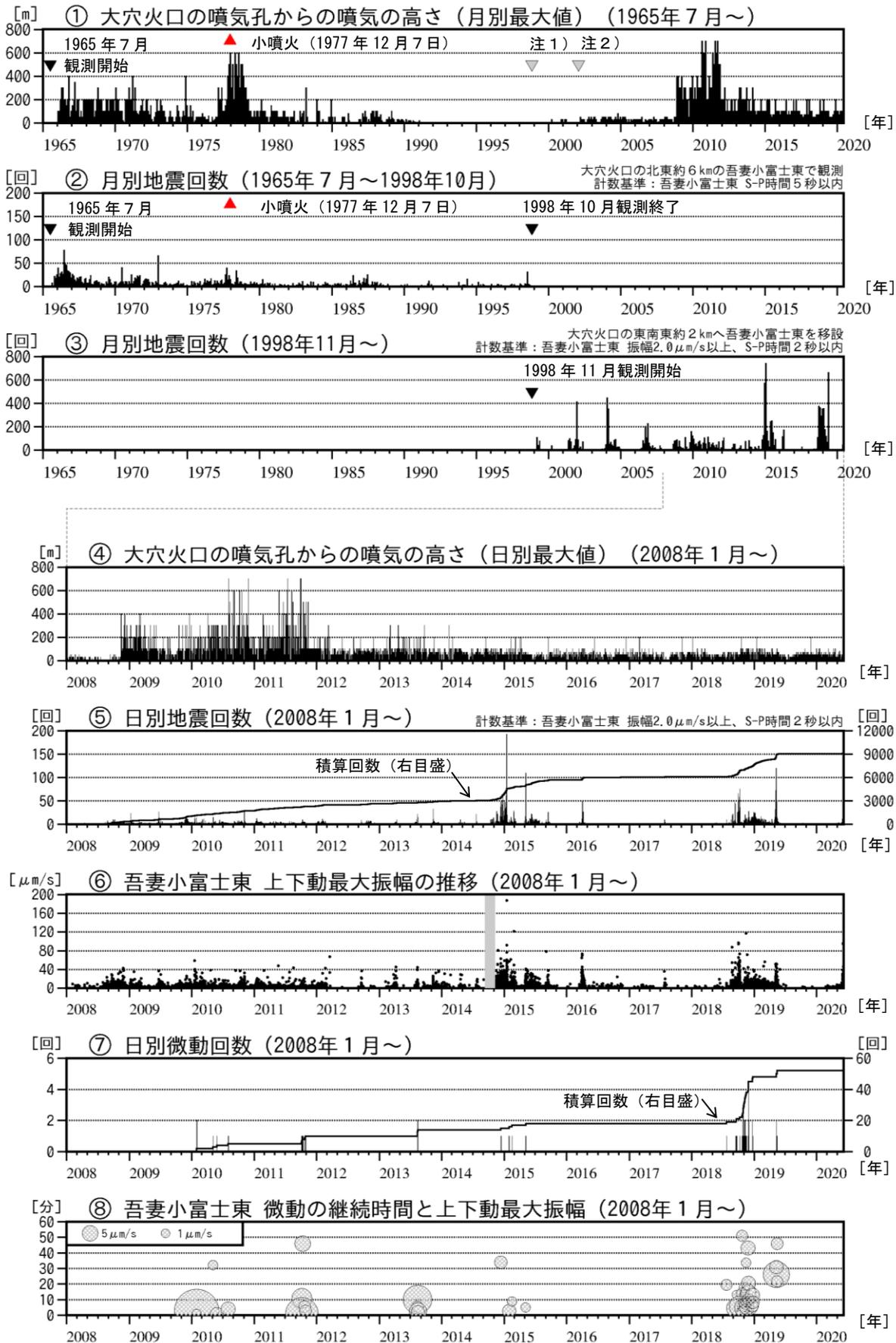


図1 吾妻山 火山活動経過図（1965年7月～2020年6月4日）

注1）1998年以前は福島地方気象台（大穴火口の東北東約20km）からの目視観測で、1998年からは監視カメラ（大穴火口の東北東約14km）による観測です。

注2）2002年2月以前は定時(09時、15時)及び随時観測による高さ、2002年3月以後は24時間観測による高さです。

・⑥の灰色部分は欠測を表しています。

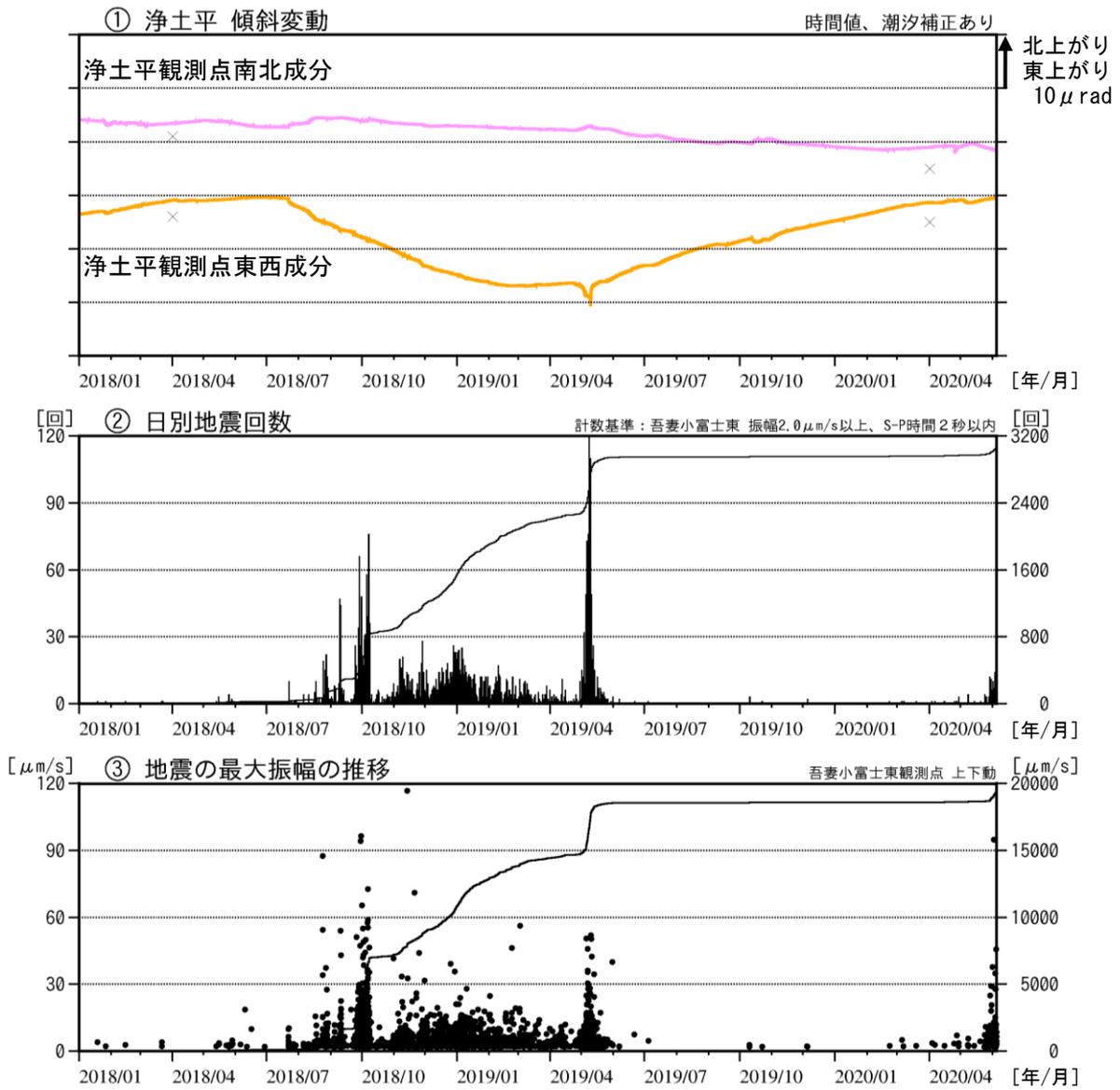


図2 吾妻山 火山活動経過図（2018年1月～2020年6月4日）

- ・火山性地震は、2019年6月以降少ない状態で経過していましたが、5月24日頃からやや多い状態となっています。また、2018年以降の活動と比較して振幅のやや大きな地震も発生しています。
- ・浄土平観測点の傾斜計では、今期間、火山活動による明瞭な変化は認められません。
 ×：融雪期には北西上がりの変動がみられます。

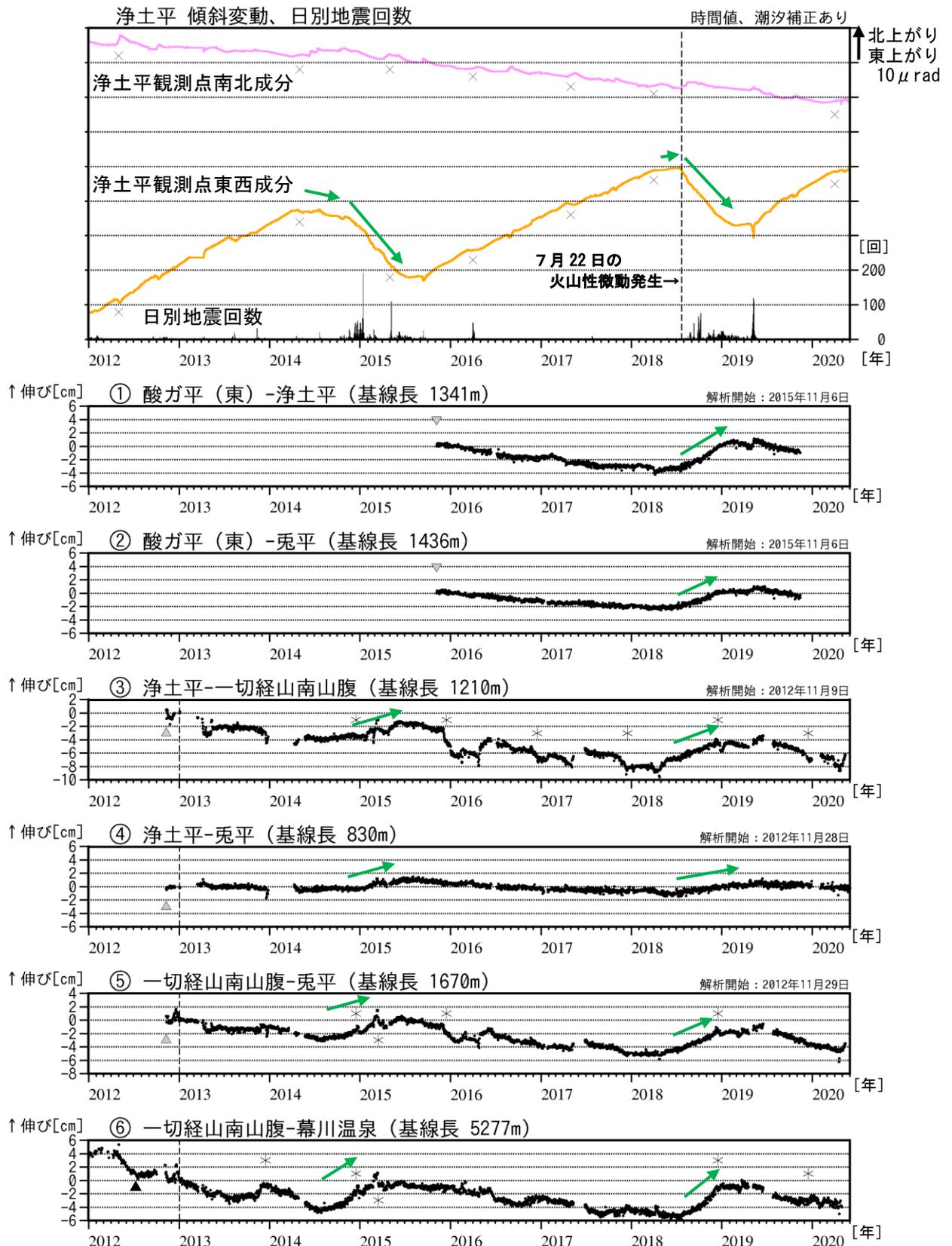


図3 吾妻山 傾斜変動及びGNSS基線長変化図（2012年1月～2020年5月）

- ・浄土平の傾斜計及びGNSS連続観測の大穴火口周辺の基線では、2014～2015年、2018～2019年にかけての火山活動活発化の際に、大穴火口周辺の隆起・膨脹を示す変化（緑矢印）が観測されていますが、現在は概ね静穏な時期の変化傾向を示しています。
- ・GNSS基線長は、2013年1月に解析方法を変更しています。
- ・グラフの空白部分は欠測を表しています。
- ・①～⑥は図5のGNSS基線①～⑥に対応しています。
 - ▼▲：解析開始を示します。
 - ▲：一切経山南山腹観測点の機器を更新しました。×：融雪期には北西上がりの変動がみられます。
 - *：冬期には、原因不明の変化がみられることがあります。凍上やアンテナへの着雪等の可能性があります。

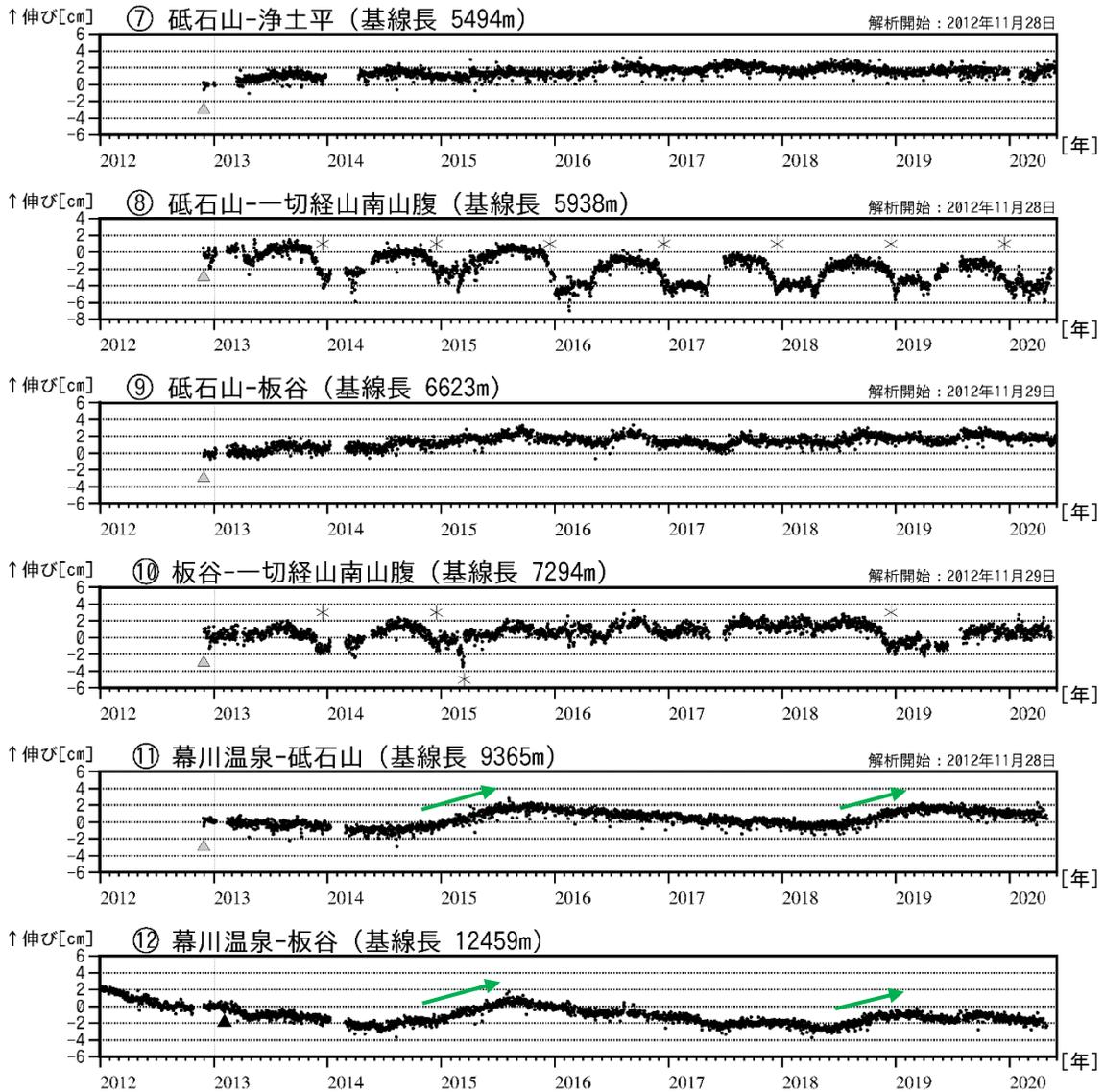


図4 吾妻山 GNSS 基線長変化図（2012年1月～2020年5月）

- ・ 2014～2015年、2018～2019年にかけての火山活動活発化の際に、大穴火口周辺の隆起・膨張を示す変化が観測されています（緑矢印）。
 - ・ GNSS 基線長は、2013年1月に解析方法を変更しています。
 - ・ グラフの空白部分は欠測を表しています。
 - ・ ⑦～⑫は図5のGNSS基線⑦～⑫に対応しています。
- ▲：板谷観測点の機器を更新しました。▲：解析開始を示します。
 ＊：冬期には、原因不明の変化がみられることがあります。凍上やアンテナへの着雪等の可能性があります。

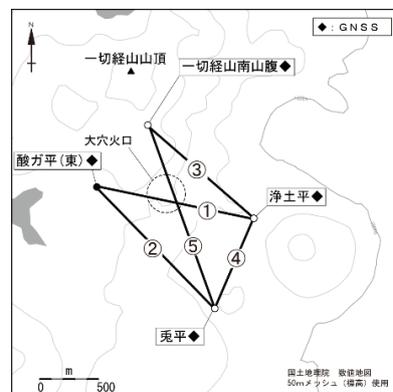
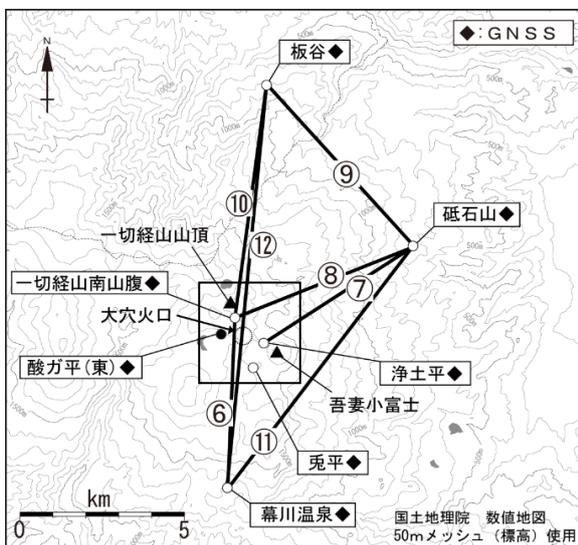


図5 吾妻山 GNSS 観測基線図

白丸 (○) は気象庁、黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 左図の四角囲みは右図の表示範囲を示しています。
 (東)：東北大学

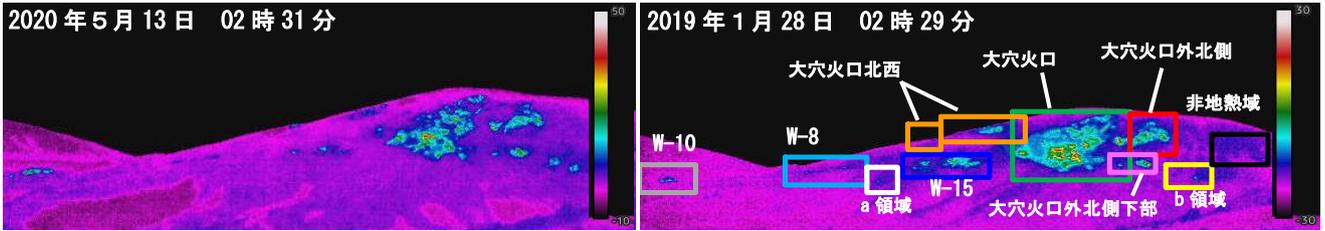


図6 吾妻山 浄土平3監視カメラ（熱映像）による大穴火口周辺の地熱域の状況

- ・W-10（灰色枠）では、2019年5月中旬頃から地熱域の温度上昇及び拡大が認められていましたが、6月中旬頃からは概ね停滞しています。

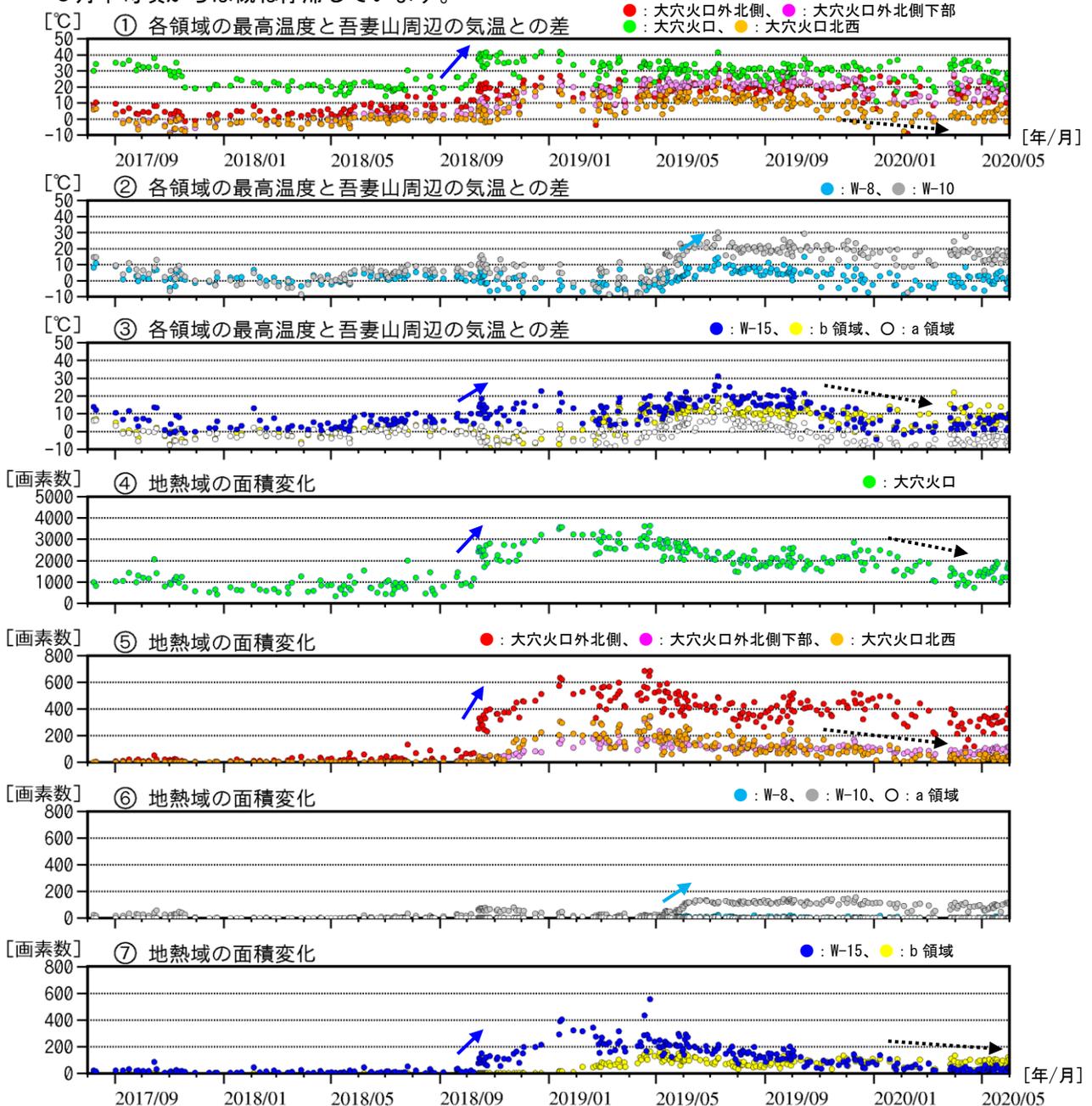


図7 吾妻山 監視カメラによる大穴火口周辺の地熱域の経過（2017年8月～2020年5月）

- ・①～③は各領域（図6の枠線）の最高温度と吾妻山の南約6kmのアメダス鷲倉の気温との差を示しています。
- ・④～⑦は領域（図6の枠線）毎に非地熱域（黒枠）の平均温度より5℃以上高い領域の画素数を示しています。数値が大きくなるほど、地熱域の面積が拡大していることを示します。
- ・大穴火口周辺（緑丸、赤丸、桃丸、黄丸）及びW-10（灰色丸）での地熱域の温度上昇及び拡大（青、水色矢印）は、現在は停滞しています。
- ・W-15（青丸）及び大穴火口北西（橙丸）では2019年11月頃から地熱域の縮小、温度低下が、また大穴火口においても地熱域の縮小が認められます。（黒破線矢印）
- ・グラフ中の点の色は図6の枠線の色に対応しています。
- ・グラフの空白部分は天候不良等による欠測を表しています。



図8 吾妻山 大穴火口周辺の噴気の状態（5月12日）

- ・左図：東北地方整備局が設置している浄土平監視カメラ（大穴火口の東南東約500m）の映像です。
- ・右図：上野寺監視カメラ（大穴火口から東北東約14km）の映像です。
- ・大穴火口の噴気の高さは80m以下で経過し、大穴火口付近及びその周辺の噴気の状態に変化は認められません。

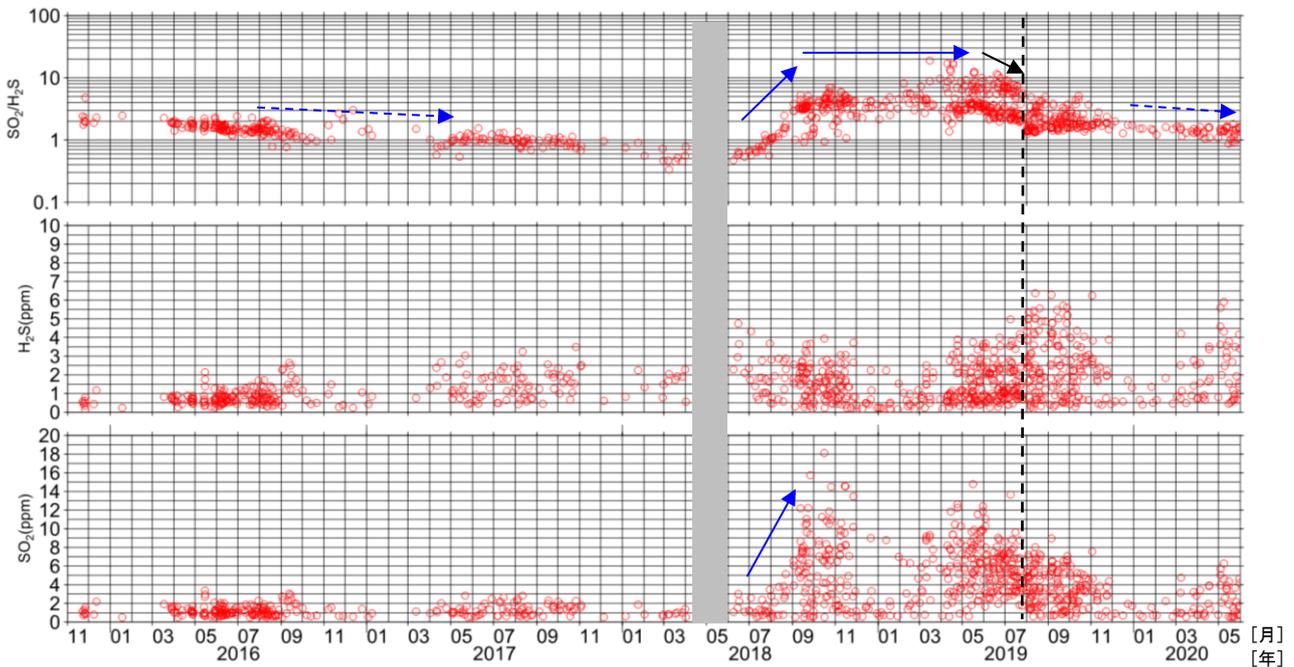


図9 吾妻山 火山ガス観測装置による観測（2015年11月～2020年5月）

- ・大穴火口の北西に設置している火山ガス観測装置による観測では、2018年7月下旬頃から噴気に含まれる二酸化硫黄（ SO_2 ）と硫化水素（ H_2S ）の濃度比（ $\text{SO}_2/\text{H}_2\text{S}$ ）※が高くなりはじめ、9月頃から高い状態が継続していました（青矢印）。その後2019年6月頃から濃度比の低下が認められ（黒矢印）、現在は概ね停滞しており、2016年から2017年頃の静穏な時期と同じ傾向（青破線矢印）を示しています。
- ・火山ガス観測装置は風によって装置まで流れてきた火山ガスと大気の混合気体中の、火山ガス成分の濃度変化を測定しています。このため観測データのグラフの濃度は、噴気中の火山ガス成分濃度を直接示すものではなく、風向き等火山活動以外の影響を受けて増減する場合があります。
- ・火山ガス観測装置は校正作業が必要となるため、この校正結果によっては値が補正され、変更される可能性があります。このグラフで示されている値は変更前の速報値を含みます。
- ・グラフの灰色部分は欠測を表しています。
- ・2019年7月にセンサー交換を行っています（黒破線）。

※噴気中の各種火山ガスは地下のマグマを由来としたものであり、その濃度や成分毎の比率（濃度比）の変化は、火山の活動状態の指標のひとつと考えられています。

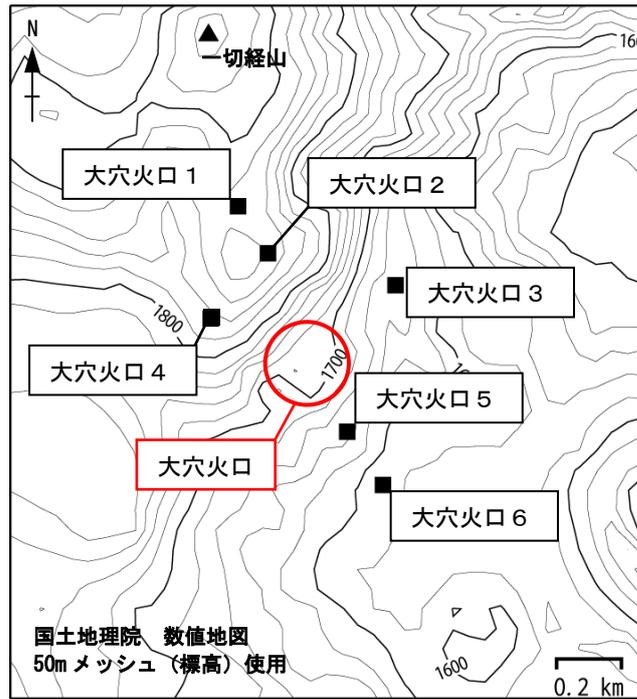


図10 吾妻山 全磁力観測点配置図

■：全磁力観測点

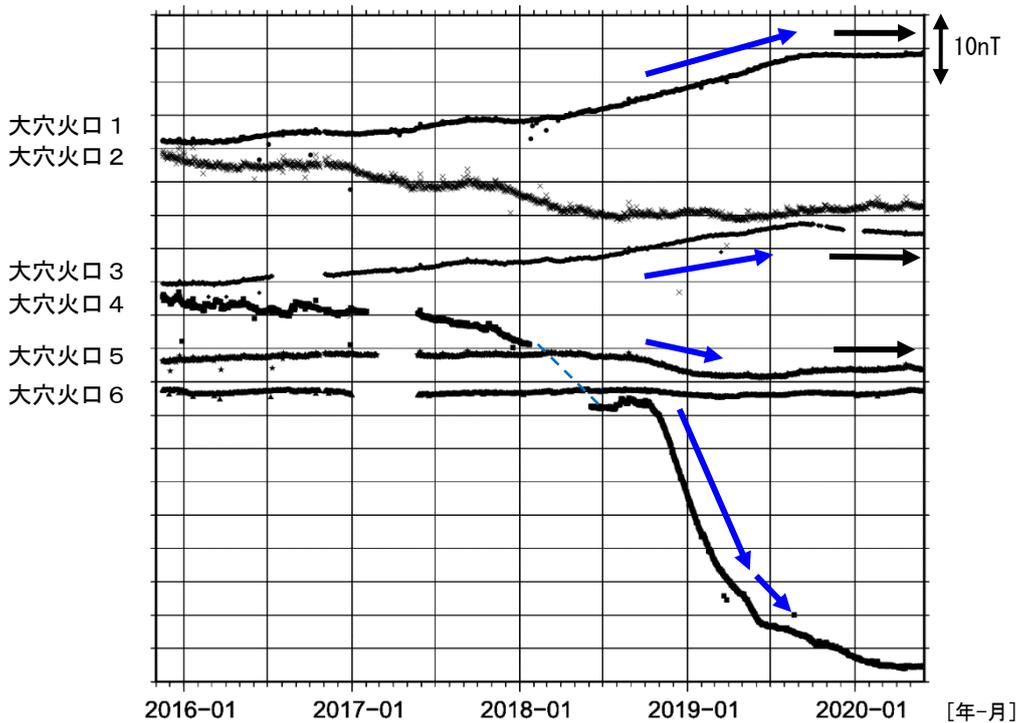


図11 吾妻山 全磁力連続観測点の全磁力値変化（2015年11月～2020年5月）

- ・全磁力連続観測のデータは大穴火口の北東約6kmにある参照点（高湯観測点）で観測された全磁力値を基準とした場合の各日の00時00分から02時59分の平均値を示しています。
- ・青破線で示す観測点大穴火口4における全磁力変動は、観測機器を再設置したことによる人為的な変動です。
- ・全磁力連続観測では、2018年9月頃から大穴火口北西地下の温度上昇や温度上昇域の拡大が更に進んでいることを示唆する全磁力値の変化（青矢印）がみられていました。その後、次第にその変化に鈍化が認められ、現在は2018年以前の静穏な時期と概ね同じ傾向を示しています（黒矢印）。
- ・グラフの空白部分は欠測を表しています。

【参考】全磁力観測について

火山活動が静穏なときの火山体は地球の磁場（地磁気）の方向と同じ向きに磁化されています。これは、火山を構成する岩石には磁化しやすい鉱物が含まれており、マグマや火山ガス等に熱せられていた山体が冷えていく過程で、地磁気の方に帯磁するためです。しかし、火山活動の活発化に伴い、マグマが地表へ近づくなどの原因で火山体内の温度が上昇するにつれて、周辺の岩石が磁力を失うようになります。これを「熱消磁」と言います。そして地下で熱消磁が発生すると、地表で観測される磁場の強さ（全磁力）が変化します。これらのことから、全磁力観測により火山体内部の温度の様子を知る手がかりを得ることができます。

例えば、山頂直下で熱消磁が起きたとすると、火口の南側では全磁力の減少、火口北側では逆に全磁力の増大が観測されます。この変化は、熱消磁された部分に地磁気と逆向きの磁化が生じたと考えることで説明できます。図12に示すように、山頂部で観測した全磁力の値は、南側Aでは地磁気と逆向きの磁力線に弱められて小さく、北側Bでは強められて大きくなるのがわかります。

ただし全磁力の変化は、熱消磁によるものだけでなく、地下の圧力変化などによっても生じることがあります。

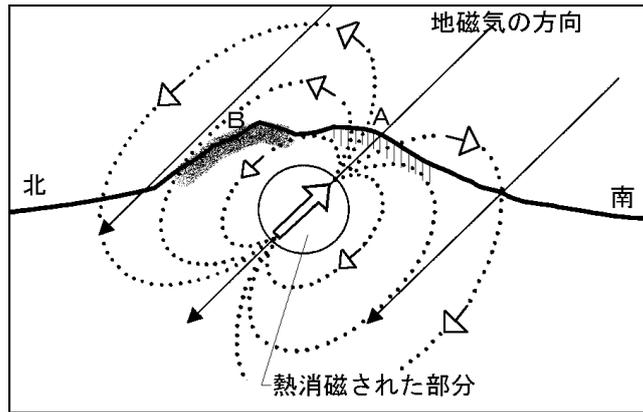


図 12 熱消磁に伴う全磁力変化のモデル

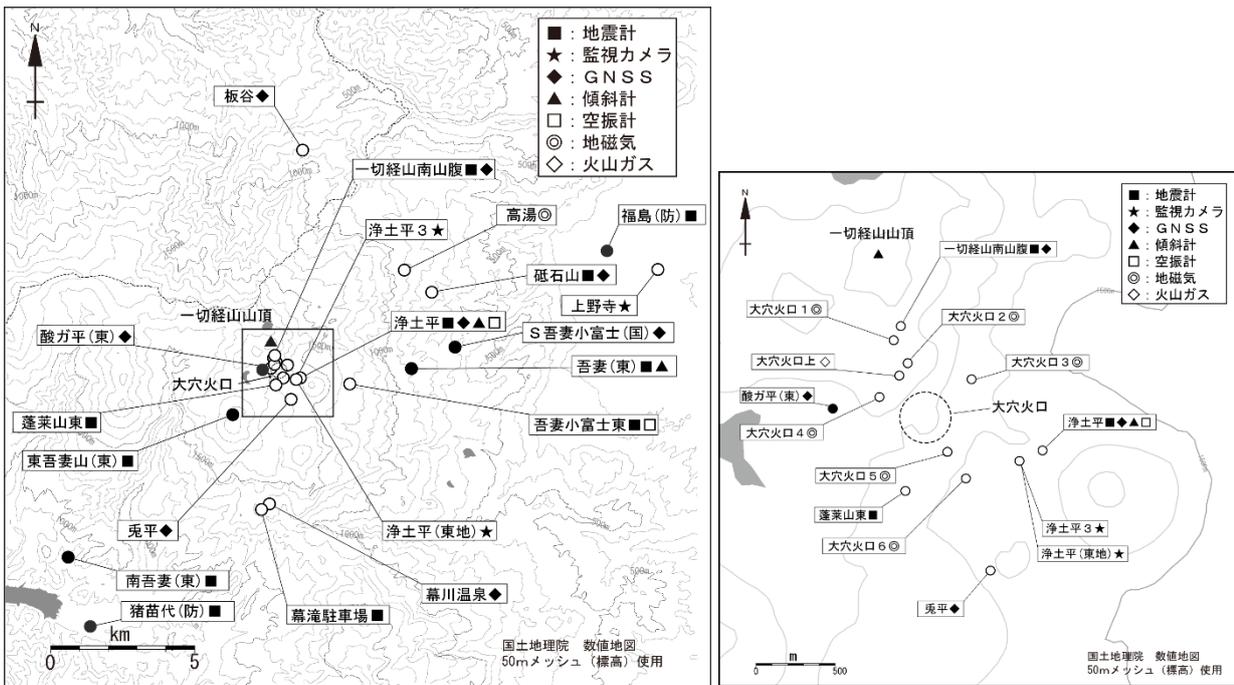
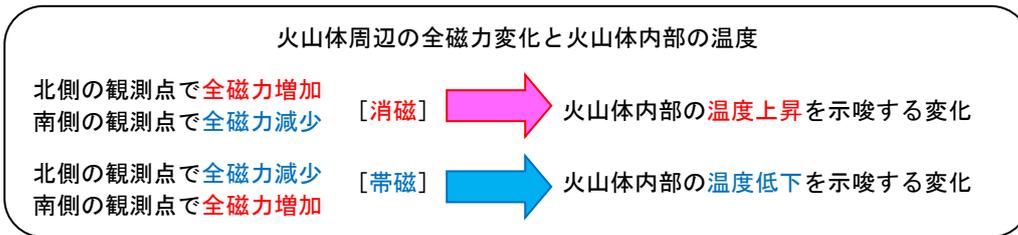


図 13 吾妻山 観測点配置図

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

（東地）：東北地方整備局 （国）：国土地理院 （東）：東北大学 （防）：防災科学技術研究所
左図の四角囲みは右図の表示範囲を示しています。